

歴史的建造物のバリアフリーの誤り 2

一手すり、景観一

○徳田克己 水野智美
(筑波大学医学医療系) (筑波大学医学医療系)
KEY WORDS: バリアフリー 歴史的建造物 実地調査

続いて、高齢者が必要としている手すりの設置の誤り、景観を壊している施設・設備、多機能トイレの設置の仕方などについて述べる。

(結果)

a) 日光東照宮 (栃木)

陽明門に至る急な石段には手すりがない。上る人と下る人を分ける木製の柵があるが、それは固定されておらず、持つと倒れる。奥社から降りてくる人は膝がわらっている状態であり、石段を転落する恐れがある。また、参道が石畳で車いすが走行しにくく、また大きな溝があり、かなりのバリアがあると感じる。

b) 鶴岡八幡宮 (神奈川)、伊勢神宮内宮 (三重)、八坂神社 (京都)、東大寺二月堂 (奈良)、春日大社 (奈良)、豊国神社 (京都)

これらの寺社仏閣は、高齢の参拝者がたいへん多く、日本を代表する観光資源である。長い石段があるが、手すりはない。

c) 湯島天神 (東京)

境内に入るための階段の手すりの脇に、大きな植木鉢が並べて置かれており、手すりを利用できない。手すりをつかもうとすると身体が斜めになり、転倒の危険がある。

d) 筑波山神社 (茨城)

石段の手すりに旗がくくりつけられており、手すりを使おうとすると旗が顔に当たるので手すりを利用できない。下りていて転び、足を骨折した高齢女性がいた。

e) 四天王寺 (大阪)

石段の手すりの先に大きな柵と看板が設置されているために手すりを有効に使用することができない。

f) 日光二荒山神社 (栃木)、六波羅蜜寺 (京都)

拝殿や本堂に上がる階段の手すりの位置が悪く、実際には手すりを使えない。

g) 吉備津彦神社 (岡山)

長くて急な石段の中央に 1 本の手すりがある。上る人も下る人もその 1 本の手すりを使用しなくてはならない。多くの寺社の石段では両脇と中央に手すりがある。その場合、中央には 1 本の手すりでも良いが、できれば大阪城の石段の手すりのように上る人も下る人もつかむことができるように左右 2 列の手すりが望ましい。

h) 豊国神社 (千畳閣) (広島)

厳島神社から豊国神社に至る石段は長い。石段の片側だけに鉄製の手すりがあるが、夏は手すりが焼けたような温度になり、さわることもできない。熱くならない樹脂製のカバーなどを施すべきである。

i) 法華経寺 (千葉)、湯島天神 (東京)、柴又帝釈天 (東京)

境内に渡り廊下がある寺社は多い。その廊下の下端や柱に取り付けた筋交いなどの地上高が低いと、下を通る人が頭をぶつけてしまう。

j) 姫路城 (兵庫)

観光資源となっている歴史的建造物の多くに多機能トイレが設置されるようになった。新しい建造物では、多機能トイレも男女別に設置されるのが当たり前になってきてい

るが、古い建物では男性トイレの中に多機能トイレが設置されているケースがある。姫路城のトイレは新しく設置されているものであり、世界遺産ゆえに、海外から多くの観光客が訪れるが、男性トイレの中に多機能トイレがある。

k) 西本願寺 (京都)

御影堂に 2 つ、阿弥陀堂に 2 つの大型スロープが設置されている。特に渡り廊下の両端の 2 つは非常に目立っており、景観を壊す。1 つか 2 つあれば十分であり、多すぎる。

l) 大阪城 (大阪)、名古屋城 (愛知)

外から見ると、エレベーターが目立ちすぎており、全体の景観を壊している。

m) 護国寺 (東京)

本堂に階段昇降機が設置されているが、どこに申し込めば使用できるのかが書かれていない。せっかくのバリアフリー設備が生かされていない。きちんと看板などに明示している歴史的建造物もある。また照国神社 (鹿児島) には、階段昇降機や車いす用エレベーターなどいくつかのバリアフリー設備があるが、桜島の火山灰のために、調査時点では故障中であった。この種の設備はこまめにメンテナンスを行う必要がある。



写真 1. 石段に手すりのない鶴岡八幡宮



写真 2. 手すりの脇に大きな植木を並べた湯島天神

付記 本研究は「2020 年度公益財団法人 鹿島学術振興財団」の助成を受けて実施した。

(TOKUDA Katsumi, MIZUNO Tomomi)